

『唐人雜鈔』について（續）

池田 温

はじめに

「東洋文庫書報」前號（二〇一〇年三月）に筆者は東洋文庫所藏の敦煌文獻殘卷『唐人雜鈔』について、はじめに

一 題署者 長尾雨山

二 舊藏機關 財團法人藤井齊成會友鄰館

三 言及・著録

四 原文移録

の構成で簡単な紹介をおこなった。四の移録は上段に全卷の寫眞を掲出したから、併せ参照されたい。

紹介の文末に「原文についての解説は次號に掲載豫定である。」と記されるのに従がい、以下留意した諸點を簡単にのべる。

一 前號掲出寫眞について

東洋文庫では、本殘卷の精良なカラー寫眞を作製し、原寸とまではゆかぬがよく原形を髣髴させ、研究乃至鑑賞者に好條件を提供している。7枚セットで

- 1 木製外箱、唐人襪鈔 長尾甲署（朱方印）
- 2 卷首外面裝幀、唐人雜鈔 文徳元季、展開の状態
- 3 卷首外面裝幀、同右、まきおさめの状態
- 4 本文1～19行
- 5 本文13左半36・37右半行
- 6 本文32～57行
- 7 本文52～62右半行、貼紙

の如く、約タテ二一糎×ヨコ二九・五糎にカラー印面二〇・五×二五・五糎、毎紙下端にカラーでスケールが示される（2のみ左端）という周到なもの。

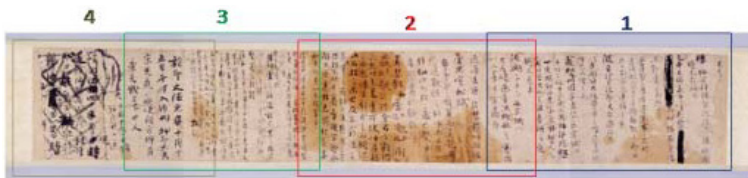
前號拙稿には1・3の要處（一頁下端）と4～7（二一～一四頁上段）の縮小掲出を許可されたので、文庫の高配に感謝したい。

なお注(1)の圖版は東京古典會の了承をいただき、部分2箇所を縮小掲出できた。ここでは「二紙行書十七行」とされるが、前號一四頁の録文では52〜62行までで「(尾闕)」となつていたので全11行しかない。57・58間の「魂」1字を1行にかぞえれば12行となるが、17行とは5行の差はのこる。このくいちがいをどう考えたらよいか。本稿執筆までには、これについて特に意見をよせられたかたはおらず、東京古典會から訂正も出ていない。しかしみのがしてよいとは思われぬので一言する。東京古典會では大入札會カタログに各本の出品店名を明記しておらず、大入札會參加顧客には會場で直接おしえ紹介するが、一般に非公開が原則で、筆者は山本書店に訊ねたけれども關西の古書肆という以上には未詳で、特に吟味を加えていない。

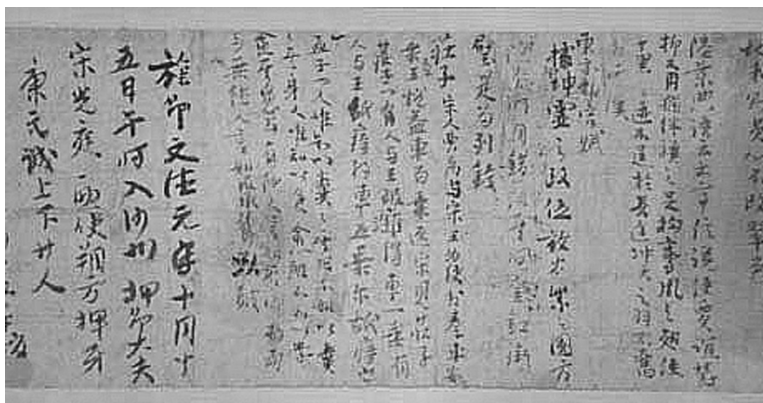
従つて可能性は十七行が十一乃至十二行の單なる誤植か、本卷が一九九〇年秋にはいまみる圖版の姿でなく十七行の文面であつたか、あるいは小生のかぞえまちがいなのか、三種のいずれかということになる。二紙は現状に適合し、筆者の録文もそうなつてゐるから、十七だけまちがつてゐると論證するのは容易でない。けれども現在原本乃至寫眞を實査したかぎりでは、11或12行でよさそうに思われる。

二 赤外線撮影と透過X線撮影

『唐人雜鈔』には紙背に一箇處3行の漢字文がすけてみえる。背面は上質厚紙が貼られており、讀解困難。そこで東洋文庫のご高配で赤外線・X線の力を借りてみよう、上野の東京國立文化財研究所保存修復科學センターに赤外



寫眞1 赤外線撮影による撮影箇所



寫眞2 部位3の可視光寫眞(上)および赤外線寫眞(下)

線撮影および透過X線撮影を依頼し、詳細な結果報告をいただいた。

そこで提供された寫眞3により、表面の東京離宮賦と類似した筆蹟の2行半にわたる文言を確認することができる。第1行13字、第2行14字、第3行7字かとみえる。その釋讀は將來唐代文學專家にまつ。末尾は「爲不朽矣」のように見え辭賦の類かと想像される。筆者は東洋史學科を卒業し中國中古史を専攻してきたが、中國文學に對する基礎學力は乏しく、釋文作成は困難でまことに相すまぬ次第である。

鈔寫者は表面の51行と同じ蓋然性が大きく、52行「旌節文德元年……」以下とは別筆であろう。

ところで、本殘卷は、典籍の整寫本ではなく、行書がかつた楷書で書寫され、4行から5行にかけて濃墨で10字ばかり抹消してあり、56・57行以下は墨線をタテと斜め格子状にえがいて數行を抹消するが、本來の文字の若干はなお讀みとれる状態に放置されたままである。卷首・卷末とも丁寧に切斷されずに裝潢がほどこされている。首尾とも相

當の長さの書寫が本來續いていたかと推察され、打棄てられてのちに取上げられ立派な裝釘が加えられたものらしい。

移録に示されるように、第4、7、13、18、36行行頭右側に○が附され、40、43行右側に――が引かれている。すなわち書寫終了後にだれかが讀んでめじるしを附けたとみられ、48行



寫眞3 部位3白線部分の裏面に書かれた文字。(Image] (National Institute of Health, USA) により画像処理)

首にも○が附されている。これら○や——を附したのは書寫者自身ではなく、後の讀者が加えたとみて差支えなからう。（「東洋文庫書報」前號の拙稿を參照）

透過X線撮影により、紙縫2箇所（20・21行間）（51・52行間）がたしかめられ、（35・36行間）には紙縫は存しないとみてよさそうである。

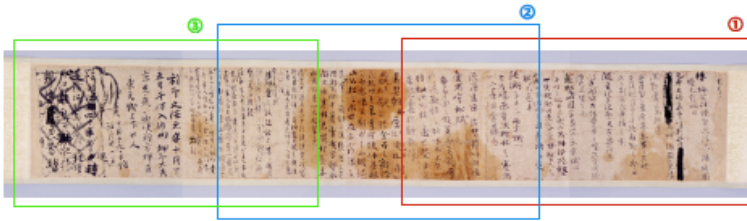
長尾雨山が裝釘を加え、木匣を製作し、卷首標題紙と木箱に題署してからは、だれも本卷にかきいれしていない。裝釘の際卷末後に跋文等をかきいられるように、上質の白紙が貼つてあるが、記入は今日まで皆無。

東京文化財研の透過X線撮影では、数ミリ程度の太さの線が横方向に分布していることが確認されており（寫眞4・5）、本紙を裏打ちした時に用いられた糊である可能性も考えられるとのことである。

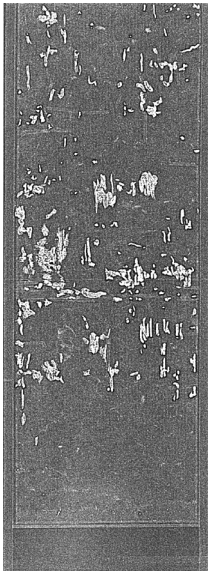
なお赤外線撮影では、本紙の簾の目（寫眞2（下）のしま状の部分）が確認されており、その太さや間隔は、中國製の紙の典型的な特徴を示しているようであるとのことであり、本殘卷の用紙が中國製と推測される。

三 前半は類書か？

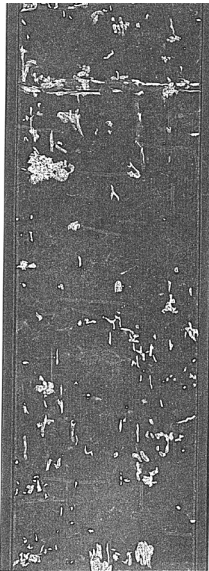
原文1～51行には、樓・兄弟・班固（東京賦）・張衡（西京賦）・唐興寒松賦）・陸景『典語』・（東京離宮賦）・『莊子』・『孟子』等が列擧されており、前號拙文で紹介したように、すでに榮新江氏により一種の類書と推定されている。但し現存する唐宋時代の類書と一致する箇所は見出されず、六朝類書の佚文にも該當するものは知られていないよう



寫眞 4 透過X線撮影による撮影箇所



部位③



部位②



部位①

寫眞 5 透過X線撮影による各部位の寫眞

である。

王三慶氏の大著『敦煌類書』（高雄 麗文文化事業股份有限公司、一九九三年六月初版1刷、精裝兩冊、上冊、壹研究篇、貳録文篇、參校箋篇、九三二頁、下冊、索引篇、圖版篇、九三三〜一四九六頁、定價精裝二冊、二千元）は王三慶氏と助理郭長城・康世昌・謝明勳計4名の協力になる勞作で、極めて整然と編纂されており、刊行后今日まで17年ちかく敦煌本類書の津梁としてひろく参照活用されてきた。本書圖版篇には、〈修文殿御覽〉・〈勵忠節抄〉・〈類林〉・〈事森〉・〈瑠玉集〉別本・〈勤讀書抄〉・〈應機抄〉・〈新集文詞教林〉・〈新集文詞九經抄〉・〈對語〉・〈簾金〉・〈蒙求〉・〈兎園策府〉・〈李嶠雜詠張庭芳註本〉・〈古賢集〉・〈珠玉鈔〉等おびただしい敦煌類書の原影を蒐録し、録文篇・校箋篇に釋文・校註を提供、更に〈敦煌類書引書、人名、辭條四角號碼索引總表〉〈敦煌類書人名索引〉〈敦煌類書引書篇名索引〉〈敦煌類書辭條索引〉よりなる索引篇を具え、卷頭の總序と研究篇の詳細な分類、概説、各書別解説、評價と相まつて讀者に貴重な情報を提供する。

但だこれを一覽した所〈敦煌雜鈔〉は收載されていない。本書校箋篇末の引用書目（九二九〜九三一頁）には傳存類書はじめ四部の要籍が列擧されるけれども、近代の内外研究文献のビブリオグラフィは見當らない。

四 本殘卷の性格

筆者は東洋史学科出身で、西嶋定生先生（一九一九〜一九九八）の御指導下に大学院で唐代均田制施行の實狀をテ―

マに修論をまとめ、中國中古期（魏晉南北朝・隋唐時代）の法制・社會經濟史を專攻し、北大文學部・東大東洋文化研究所・創價大學文學部等で數十年間教學に従事した。

その間近代東亞の文化交流史に關心をよせ、若干の論考を發表したが、いずれも史學にかかわるもので、文學には全く門外漢にすぎなかった。

従つて、「唐人雜鈔」を解説するに不適任な點は重々承知しており、唐代文學研究の泰斗佐藤保先生（お茶の水女子大學名譽教授）に本殘卷に該當する資料の存否をお訊ねした。親切な先生は檢索された結果見當らないと教示賜わつた。

これによつてみれば、本殘卷は唐代の既知文獻ではなく、ユニークな資料として扱かわれねばならない。録文を一見して留意されるのは、51行以前と52行以下の外型に明瞭な差異が認められることである。丁度そこに紙縫が存し、前は寫本、後は公文と辨別される。公文は文徳元年（八八八）の河西歸義軍節度使に張淮深を任ずる旌節メモとみなされ、56・57行上半と58行以下が抹消されている。51行以前の寫本とは内容に關聯が全く見出されない。

2行の樓1字は目立つ濃墨でやや大字に書かれ、項目のみだしかとみられる。2・3兩行は、

梅梁桂棟 架迥浮上 繡桷彫楹 光霞爛目

の4字4句。梅の梁、桂の棟、繡の桷、彫の楹、の四者が樓の材質、第二第四句が高くそびえ、輝いている形容。

第4～9行が兄弟の項。訓讀を試みるなら、

天倫義重く斷臂を嗟なげいて増悵を弔し、同氣情深く臂亡を歎じて軼慮せん。薛苞の聚居を耻じ、姜宏の共被を慕ふ。

遂に桓山の四鳥をして長く離別の聲を（鳴）り、田氏の三荊永く連梢の影を茂らす。

第10行、瀛（海）□記、巨浪天を驚かし、奔（は）濤（し）日（を）に浴す。

第11・12行 門庭閑寂にして鸞雀の喧（か）を□□し、院宇凋殘、唯（た）丘塘（あ）の雨を見る。

4行の斷臂は辭書を見ると、禪宗の達磨と慧可の故事が著名だが、兄弟とは無關係。《漢語大詞典》6・1〇九九頁は、『新五代史』雜傳序「予嘗得五代時小説一篇、載王凝妻李氏之事……家青齊之間、為魏州司戶參軍、以疾卒于官。凝家素貧、一子尚幼、李氏攜其子負遺骸以歸東。過開封、止旅舍。旅舍主人見其婦人獨攜一子而疑之、不許其宿。李氏顧天已暮、不肯去、主人牽其臂而出之。李氏仰天長慟曰、『我為婦人、不能守節而此手為人執邪？不可以一手並汚吾身！』即引斧自斷其臂。」、明邵璨《香囊記 強婚》「豈不聞李氏斷臂、清風滿耳如生。」、《剪燈餘話・鸞鸞傳》「效投崖之烈女、慕斷臂之貞妻。」、清黃宗羲《唐烈婦曹氏墓志銘》「夫溧陽女子、一言而沉身、王凝之妻、倉卒而斷臂。古人於生死際、處之至精、今人見其為輕耳。」を引用し、「女子の貞潔守身を謂う」と解す。

本殘卷には姉妹の項がないので兄弟の舉例となつて不自然の感を免れない。

6行の臂亡は、「臂亡齒寒」くちびるうせればはさむしの意。出典は《春秋左氏傳》僖公五年・哀公八年の記事。關係の親密なたとえ。

7行の薛苞・姜宏については、前號の録文で「聚居」と録した「聚」字は圖版をよくみると別字に釋す方がよく、裏とみるのも一案。裏居の熟語は目下見當らぬが、共被（同じフトンで寝る）と對になるので單獨でくらす意味あいか。なお人名の薛苞・姜宏も確認できぬが、漢人薛方や姜肱と關係あるかもしれない。

8行の桓山四鳥く離別之聲は前號脚注に記したように、『孔子家語』卷五顔回第十八の(二)項にみえる。藤原正氏の校譯を下に引いておく(岩波文庫33—202—2・一九三三年第1刷、一九八八年第6刷、一一八頁)。

孔子、衛に在り。……顔回、側に待す。哭する者の聲甚だ哀しきを聞く。子曰く「回、汝これ何の哭する所なるを知るか」と。對へて曰く「回以へらく、この哭聲は但に死者の爲めにするのみにあらず、又生離別ある者なり」と。子曰く「何を以てこれを知る」と。對へて曰く「回聞けり、桓山の鳥、四子を生み、羽翼既に成りて將に四海に分れんとするとき、その母悲鳴してこれを送れるを。哀聲これに似たる有り。その往きて返らざるを謂へばなり。回竊に、音の類せるを以て、これを知る」と。孔子、人をして哭する者に問はしむ。果して曰く「父死し、家貧し。子を賣りて以て葬り、これと長く決れんとす」と。子曰く「回や音を識るに善し」と。

8〜9行の「田氏三荊」は漢の田眞兄弟の故事で、夙に中田薰・仁井田陞兩先學が兄弟遺產相續の均分の事例として注目された。出典は『太平御覽』卷四二一人事部六二、義中に引く《續齊諧記》(梁の吳均撰)。

田眞兄弟三人、家巨富而殊不睦。忽共議分財、金銀珍物、各以斛量。田業生貲、平均如一。唯堂前一株紫荊樹、花葉美茂。共議欲破為三、人名一分、待明就截。尔夕樹即枯死、狀火燃葉萎枝摧、根莖燋燂。眞至攜門而往之、大驚謂語弟曰、「樹本同株、聞當分析、所以燋燂。是人不如樹木也。」因悲不自勝、便不復解樹。樹應聲遂更青翠、華色繁美。兄弟相感、更合財產、遂成純孝之門。眞以漢成帝時、為太中大夫。(中華書局影印宋版、第二册、一九四四頁)、中田薰『唐宋時代の家族共産制(一)』(國家學會雜誌四〇卷七號(一九二六年)、一六頁、仁井田陞『支那身分法史』東方文化學院東京研究所、一九四二年一月、東京大學出版會縮影印、一九八三年二月、三八〇

頁。

10行の首3字は書名のようだが、第2字をどう読むべきか未詳。以下4字2句、海景。

11・12行、4字6字2句、庭宅の荒廢のすがた。海景と庭宅は無關係、兄弟との關連もなさそう。

13～35行は前號脚注の如く漢の班固(三二～九二)〈東京賦〉・張衡(七八～一三九)の〈西京賦〉の抄録と撰者未詳の〈唐興寒松賦〉、前二者は著名な漢賦で長文のごく一部の抄録にすぎないが、〈唐興寒松賦〉は全文を傳えるとおぼしく貴重な佚文である。撰者未詳だが9世紀以前の唐人の作で味讀に値しよう。

40～43行の〈東京離宮賦〉も佚文らしいが斷文で價值に乏しい。

36～39行の陸景「典語」は諸子の一種で三國呉の陸景の撰。『隋書經籍志』著録。興膳宏・川合康三兩氏著『隋書經籍志詳攷』(汲古書院、一九九五年)四八四頁に左の解説あり。

儒家(30)——2 典語 十卷(陸景撰 亡) 新唐 陸景典訓十卷 通志 典訓十卷 陸景撰

(30)——3 典語別 二卷 並吳中夏督陸景撰 亡。

陸景(二五〇～二八〇)、字は士仁、吳郡吳(江蘇省)の人。陸抗の子で、陸機・陸雲の兄。吳の偏將軍・中夏督となったが、吳の滅亡に際して殺された。三國志吳書一四陸抗傳によれば、景は學を好み、書數十篇を著わした。史通自敘篇にも、「陸景典語」の名が見える。典語は羣書治要四八に佚文七篇を收める。

また意林(宋刻)には「典語十卷」とあり、佚文二則を引く。

なお七六八頁に、

別集(81) — 1 又有陸景集一卷 亡

陸景は、子部儒家(30) — 3 參照。通志 陸景集一卷 「輯本」全三國文七〇

とある。なお佚文を蒐録した清代の嚴可均(一七六二—一八四三)と馬國翰(一七九四—一八五七)の輯本が(四録堂稿)適園叢書第五集、及び「玉函山房輯佚書子編儒家類・嫻媛館刊玉函山房輯佚書子編儒家類」、兩種あるが、本殘卷の殘文は含まれていない。

44 ~ 47 行の莊子、前號脚注にのべた以上には調査していない。

48 ~ 51 行の孟子、前號脚注の所見にとどまる。

52 行の旌節、文徳元年以下に關しては、前號の記述以降、特に新知見はない。

饒宗頤氏がこれら諸子殘文を無視されたのは、特筆すべき優點が見當らなかつたからと推察される。

書蹟としても決してすぐれてはいない。但だ中流下流文人の習學乃至研讀の實例として、教育史や學術史の參考資料とはなるであらう。

本稿の執筆にあたっては、東京文化財研究所保存修復科学センター主任研究員の吉田直人・犬塚将英両氏の御協力をいただいた。ここに記して厚く御礼申し上げたい。

(東洋文庫研究員・東京大学名誉教授・創価大学名誉教授)

